

第43話 (24頁) 川のネズミと家のネズミ

原っぱの川べに住むネズミが、人の家に住むネズミのところに遊びにきました。2ひきは家で食事をしました。お客のネズミが飲みものをほしがりました。家のネズミは、お客をバケツのところにつれていきました。バケツのまわりには、水がこぼれていました。

「どうぞ、めしあがれ。」

川のネズミはつんと鼻をもちあげて、

「これを飲むんですって！ わたしのところでは、のどがかわいたら、まっすぐ川に行って、ひろびろした川から、すきなだけ飲むのです。」

すると、家のネズミはこう言いました。「この水も同じことです。そちらでだって、おなかに入るだけしか飲めやしないのでしょ。」

「バケツからこぼれた水だって、広い川の水だって、飲める量は同じじゃないか。家のネズミの言い分で話を締めくくっている。そう言われれば確かにそうだけどね。」

「ちょっと釈然としないよ。トルストイは何を言いたかったのか。」

「郷に入っては郷に従え、というメッセージかな。あるいは『調和』かな。」

「川のネズミは、とてもびっくりした。『つんと鼻もちあげて』『これを飲むんですって！』と、目を白黒させている様子が浮かんでくるようだ。」

「感嘆符が効いている。原文では『ええっ』といった擬声語も使っているが、その雰囲気は訳でも十分に伝わってくる。」

「川のネズミは、てっきりバケツから飲むのかと思ったようだけど、違うね。バケツから床にこぼれた水をなめるように口に吸い込むというんだ、きっと。」

「トルストイの『国民教育論』では、画一的な教育姿勢に異を唱えている。農民、職人、都会生活者はそれぞれの（生活）条件に取り囲まれているのに、『学校はこれらの条件からの隔離をもってその教育の第一条件としている』と書いているからね。そんな考えが背景にあるという見方もできないかな。」<参考1>

「そういうふう発展させるのなら、トルストイが好きだった『老子』も考えられるよ。『足ることを知る者は富めり』『其の所を失（たが）えざる者は久し』といった記述とつながってこないだろうか。」<参考2>

「少し無理筋な印象もあるので、このあたりにしよう。」

<参考>

(1) 『国民教育論』昇曙夢・昇隆一訳、玉川大学出版部、1984年、63頁

(2) 『老子』 小川環樹訳注、中公文庫、1973年、70-71頁